

ノンネイティブ・クリエイティブ：インタビュー

末次さや

(ビデオの通り)

アリーシャ：今回のノンネイティブ・クリエイティブには、末次さやさんと話しています。

彼女は東京インターナショナル・プレーヤーズ（TIP）の代表です。

さや：英語の演劇を皆にアクセスしやすくなって、その状況が続ければ嬉しいです。

デジタル化が進んでいて、素晴らしいと思いうんだけど、ある瞬間を楽しんで、同じ部屋にいる100、数百人と共有できるってなかなかしないよね、最近。

凄く特別はことですね。

アリーシャ：国際的な活動、または自分の国以外の活動を開始するきっかけはなんでしょうか。

さや：幼稚園の時、お父さんの仕事でアメリカまで引っ越した。その時、初めて英語に触れた。

その若い時代には、「話している言語」なんて考えない。普通の学校へ通っていた。

そして日本に帰ったら、もう考えずに英語を喋って、「どうやって英語を学ぶ」とかの迷いはなかった。

両親はまだ英語の勉強を続けてほしいということで、高校卒業まで国際学校へ通って、国際大学へいきました。そんな感じだった。

アリーシャ：その経験から、クリエイティブな活動の興味がきました？

さや：ニューヨークに住んだ時、両親はアート等のレッスンを紹介しました。バレエ、タップダンス、体操とか。すぐ気になった。そこからずーと続けてきた。

大学に行くため、ニューヨークへ引っ越した時も、ブロードウェイを観たかった。

「勉強のためニューヨークへ行きたい」と言っていたが、実はものすごくブロードウェイ演劇を観たかったです！（笑）夢中にさせた。劇場がとても近くて、「今週末どうしよう」と思ったら「演劇を見に行かない？」って。素晴らしかった！

アリーシャ：どうやってその気持ちを東京まで持ってきました？

さや：大学を卒業してからニューヨークで仕事ができ、テレビ業界で働いた。職場で「ブロードウェイの人」になって、時々仕事でも自分の興味を生かした。

日本に帰ったら、演劇を続きたかったです。

そして、仕事として演劇のパフォーマンスをするのは無理と理解した、自分として。キャリアとしてパフォーマになる人はやっぱり精神的に強いと思いますね。私はそんなに強くない。

だからある意味で安全な道を選んだ。「普通の仕事」をしながら、演劇等を趣味とします。TIP はそんなことですね。

アリーシャ：現在のプロダクションは？

さや：現在はシェイクスピアの「ヴェローナの二紳士」という演劇をやっています。あんまり有名ではない、というか初期の演劇ですね。

そして今回のキャストは全員女性です。彼女たちは素晴らしいです。皆はすごく才能、面白いと思います。今回私はアシスタントディレクターをやらせていただきました。

アリーシャ：TIP には、全員女性の演劇って普通ですか？

さや：いや。ディレクターの提案で全員女性でやっています。今、1シーズンで3演劇をやります。シーズンはアメリカの学校のカレンダー通り：9月から6月まで。

今回のシーズン、最初はスウィーニトッド。そして5月の最後の演劇は「ザ・フー：トミー」。両方のキャストは男性役多いです。

演劇によって、ジェンダー交換の制限はあります。例えば「この役は構わない」とか「この役は男性」、「この役は女性」とか。

その状況だから、ディレクターの全員女性キャストの考えを持ったは素晴らしかったですね。

今の時代には、私たちはいいことをやっていると思います。

アリーシャ：ボランティアの演劇ですが、リハーサルはどこで開催される？

さや：演劇によるかもしれないのですが、今回の場合、ステージマネージャーとプロデューサーと一緒にリハーサルスケジュールを決める。

プロデューサーは「Our Space」というスペースのオーナーで、よくそこでリハーサルが開催される。他のグループが予約された場合、別のところへ行きます。区民センター等。

アリーシャ：リハーサルはどんな感じでしょうか。

さや：普段、演劇3、4か月前、オーディションをやります。リハーサルが始まったら、週3-5回ぐらいリハーサルします。平日はもちろん夕方です。

週末の場合、キャストの多くの方の都合と合わせます。

本番が近づいたら、週末のリハーサルがながくなるかもしれない。1時から10時までとか。

アリーシャ：毎年3つの演劇という話ですが、シーズンの始めに決めるのはそのシーズンの演劇ですね。どやって決めます？

さや：ディレクターは提案を提出する。その提案に、希望のチーム、使いたいセット、コスチュームの写真も提出する。制限はなんですか？気を付けないといけないことはなんですか？とか。

大人数のお客様が来るように決めるというより、大事にしているのはディレクターの熱心です。

ミュージカルの場合、権利の料金はすごく高い。TIPのスケジュールにより、5、6のパフォーマンスをする。3、4か月間のリハーサルから。5、6回だけできる。

そしてミュージカルの場合、各パフォーマンスが600ドルから1000ドルになります。結構払っていますね、演劇をパフォーマンスするため。やっぱり高くなる時もあります。なので、時々シェイクスピアみたいな演劇をやりたいですね。そんなに高くないから。

アリーシャ：東京に初めて来たとき、TIPのことを聞いて、そして、「コミュニティー演劇」のイメージをした。ある場合、「コミュニティー」という言葉は少し悪い意味で「手作り」のイメージになっちゃいます。おばあちゃんが手で作ってくれたセーターみたい。手でセーターを作るおばあちゃんたちへ気を悪くしない！私もセーターを手で作るよ！

でも、そのイメージを頭に持っていた。最初のTIPの演劇を見に行ったら、ものすごく驚きました。「わ、本物だ！」と思った。素晴らしかったです！

スペース、ステージもよかったです、コスチュームも素敵だったし、照明、音楽等も、、、本物だった！今まで見たの演劇も同じ質でした。

なので、それをできるようのための色々を学ぶのって、、、そして無料でね。皆ボランティア。すごいよね。

今までの経験ですが、違う国、違うバックグラウンドの方々と活動することで、何か特別なことはありますか。

さや：私たちの共通点は劇場への情熱です。パフォーマでも、音楽担当でも、照明担当でも。それぞれ違うバックグラウンドを持っている人たちが一緒に活動することで、特別なものが生まれるんです。

皆は演劇を勉強したわけではない。私も。プロフェッショナルで。しかし、勉強した方もいる。

なので、その方から学べて、その知識を生かして、、、すごい。

自分がパフォーマなら、集中することはステージに立って、自分のセリフを覚えて、色々そのようなことですが、パフォーマの私たちが忘れることは実際、本当に多くの人たちが支えてくれているんです。

照明がちゃんと管理するため。コスチュームを準備してくれる。それぞれの部分。それを学べるのは一つですが、やっぱり他の大事なことは皆ボランティアでやっています。お金ももらっている人はいない。

ですので、素晴らしいグループです。

アリーシャ：少し、お客さん側についても少し聞きたいと思います。

どのような人が TIP のパフォーマンスを見に来ます？

さや：有名な演劇なら、日本人のお客さんを引き込むのはやりやすくなる。一般的に、あんまり有名ではない演劇の場合、お客さんを引き込むことはちょっと難しいですね。

例えば、10月にはスウィーニトッドをやりました。スウィーニトッドは日本での有名なミュージカルだから、日本人のお客さんを引き込むことは普段よりやりやすかった。そして、皆はストーリーを知りました。オーディオガイドがなくても、分かりやすい。

アリーシャ：オーディオガイドって何でしょうか。

さや：難しいのでミュージカルのためあんまりやらないけど、普段は普通の演劇で準備するんです。例えば、歌舞伎を見に行ったら、イヤホンでシーンの説明を聞けます。日本語で。

今より多くの日本人のお客さん引き込むようではなく、日本人のお客様の劇場経験を支えていくためですね。

アリーシャ：ということで、毎回それを準備しないとイケないですね。難しいです。自分でやっていますね。

さや：はい。（笑）今翻訳チームがいます。素晴らしい人たちです。ディレクターはスクリプトを読んで、大事、オーディオガイド用の箇所を指定する。

それを翻訳チームへ送る。翻訳チームがそれを読んで、和訳して、プロダクションチームへ送る。プロダクションチームのバイリンガルの人たちは和訳をもう一度読みます。それから、録音します。最近私はそれを中心しています。オーディオガイドの声です。

アリーシャ：今より、多くのお客様が欲しい？

さや：もちろんです！もし、ショーを見に行けるなら、私たちは嬉しいです。チームで3、4か月前から頑張っていますから。そしてディレクターの方々はやっぱり1年以上。最初の「ああ、あの演劇をしようかな」の考えからステージまで。

見に行きたいなら大歓迎です。

アリーシャ：観に行きたい場合、情報はどこからアクセスできますか？

さや：ウェブサイト www.tokyoplayers.org から、SNS 等もあります。

アリーシャ：はい。そして、毎回、ディレクター、アシスタントディレクターとの交換のチャンスもありますね。Q&A のセッションでもお客さんも参加できますね。

さや：はい。普通になったことは土曜日のマチネーが終わったら、ディレクターのトークセッションをやります。Q&A もやります。プロダクションチーム、キャストもステージから質問等を回答する。

その時、学校からのグループも多い。学生は劇場等に関するの質問を聞く。「自分のセリフをどうやって覚える」とか「だれがコスチュームを作った」とか。知りたいこと等。

アリーシャ：個人的に次回のパフォーマンスも楽しみにしています。多くの人も見にいけばいいと思います！素晴らしいです！今日は本当に私と話してくださってありがとうございました！考え等を教えてくれて感謝しています。

今回のノンネイティブ・クリエイティブで末次さやさん、東京国際ナショナル・プレーヤーズの代表と話しさせていただきました。是非、TIP のウェブサイト等をチェックして、パフォーマンスを見逃さないで！みてくださってありがとうございました！またね！

ディレクター：私たちの考えで、昔のルネサンスっぽいイメージです。

さや：その瞬間にいる必要があると思います。皆そう言うよね「ああ、いればよかった」とか。しかし、その瞬間を感じるため、いる必要がある。

その夜、または次の夜には、同じにならないから。それはすごいと思います。